

■想い出の飯田中学時代

山は青き

林 京平（中41回）

通学コースのあれこれ

計ったことがないから、鼎の上山から学校まで、どのくらい時間がかかったか、確かな記憶はない。入学したての頃は、定刻に向うの坂の頭で一級上の伊藤さんが、村中に聞えそうな声で「ハ、ヤー、シー」と呼ぶのを待ちかねて出かけた。小学校の前を大きめな鞆に制帽、編上げの靴でちょっと誇らしげに通り返りすぎた。松川を越し、野原の酒蔵の間の愛宕坂を登り、知久町から広小路、眼鏡橋を渡って馬場町を東に、突き当たって北へ真っ直ぐ行って、野底川を渡ると学校が近い。この定期コースは三年生ぐらゐまでは判で押したように守った。

昭和十二年の入学だから、物資の不足で、そのうち下駄通学が許された。番傘・竹刀などを持った上に、雨で滑る朴菌の下駄は、雪にも悩まされた。それでもかた



●はやし・きようへい
大正14年誕生まれ。中41回卒。
昭和17年早稲田大学に進学したものの、在学中に三重海軍航空隊に入隊、終戦までの1年間在隊。戦後復学、同25年卒業。同大学演劇博物館に勤務(学芸員)し、平成3年退職後、(財)遺言協会に属し、現在理事長。

くなに凸凹道を通った。途中で病気のために、自転車通学が許された。一の谷の逆落としよろしく急坂を駆け下り、乗ったままで登ったことも何回かあった。通学時間は短縮され、進級するにつれて行動範囲も拡大したのは勿論である。馬場町を曲らずに伝馬町を真直ぐに、浜井場の飯田高女の門前をそとスピードを落として往き來した。

坂道、近道、狭い道

寒稽古だけは五年間を通じて皆勤した。この時は近道をとった。鼎橋の少し下流に、大雨が降るとすぐ流されてしまう「ゆさゆさ橋」と呼ばれた仮橋があった。それを渡ると城下の運動場の隅に取り付く。横切って三宜亭の下から野底川を渡り、夜泣石の脇を御殿山を登り、畑を横切って体操場の裏手の土手を這い上がる。体操場の

向うの端に下駄箱があったから便利だった。約十五分くらいは稼げただろう。当然、裏道で見つかることやバイ。だが、遅刻しそうな時にはしばしば利用した。

帰りは谷川線にあった叔母の家へ立ち寄ることしばしば。従兄弟たちと遊び、一休みも二休みもしてから、神輿を上げた。主税町から追手町を横切り、常盤町へ出て三味線の音のする狭い小路を抜けると水の手へ出た。鼎へUターンする道の途中に、石垣に沿って崖を下る狭い道があった。これが愛宕坂の下、野原の酒蔵の脇へ出る。もう松川はすぐそこで、これも近道の一つだった。

現在ほどの道筋にしろ、まず利用されていないだろう。歩くことが殆どなくなって、自家用車やバイクの利用が多くなった。だから狭くて急な坂道は避け、遠回りでも舗装された道を行くのが当たり前となった。

かつての町筋を歩いてみた

今年は七年ぶりの「お練り」だった。さらに七年先は予測しがたいので、声がかかったのを幸いに出かけてみた。練り物のあとを追って飯田のかつての町筋を歩いてみた。戦後の大火で町は多少変化したが、我々が学校へ通った道筋や道草した通りはあまり変わっていないような気がした。無理もない、台地の上のあれだけの場所では、

大きな変貌はありえないだろう。加えて周辺地域の大発展で飯田は置き去りにされ、必死に堪えて悲しげな表情を湛えているように思えてならなかった。青き山、風越がその姿をじっと見下ろしていた。

親戚との関係も薄くなり、交渉も私の世代で終るだろう。飯田は私の心の中で昔の姿のまま朽ちていくのかもしれない。同級会も遠からず開催不可能な時が来ることは間違いない。精々生あるうちに、山青き故郷を訪ねる努力をしようとしきりに思う。やはり年齢のせいなのだろうか。

財団法人 逍遙協会について

当協会は坪内逍遙の素志である舞台芸術の研究に資し、我が国の文化の向上に裨益する事を目的とした団体である。事業として古今東西の演劇の調査と比較研究、演劇図書の編集出版、学術講演の開催、演劇博物館への助成、さらに逍遙研究資料の整備刊行その他の逍遙顕彰事業等を行っている。

昭和40年3月、逍遙没後30年を機に名称を「逍遙協会」と変更した。これは当初の目的以外に逍遙の顕彰事業及び逍遙研究に力点を置こうという意志を表したものである。逍遙に対する研究はなお未開拓な部分も多い。

当協会運営の基盤となつてゐる逍遙の残余資産は、著作権の消失（昭和60年）以後減少の一途を辿るのを余儀なくされてはいるが、今後もなお逍遙の顕彰事業に尽力し、逍遙研究の中核としての機能を發揮するよう努力していきたい。